梅枝

三十二

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

御覧せさせ給ひしかは御心地さへ在
の節よりも次第に出仕し二月の比
参りのおとこあまた侍りて中にもはやりて打
随く見きゝしは正月のつこもりより松葉
中けりそくそしのとやあらの時はしまり給ひ
何を世話大小のちそまつまかゝうて此人
まつにもなくいめし今にいはれすて
むかし清しく二条院の君くてあつまさき
給ひけゆえして帰りけり其所やかくて
あさまちるまの物ちそかけりしうらなめかくに

0005839428

東京大学総合図書館

にいありさまにて比丘尼つゝしみの袖のたもとに
いとけなき物しりの孫なるものありしに東院の
御世にあらはれ給ひてこの度とのふれてまゐらす
宮の御やどりかきにてもなみの海の世になれ物
ありすまし法も御ゆるしありて清く持
清せんひとへにこれより御やうすかなふべしとて、よ
給はすることにて、今の心のまゝに御せ
給ひしくかなしくおほしめしけり世給ひしくさう
あはせ給ひて我身しさせまつりをかしみの地
それをくるとき世ありさいはひあらはれて候

はしも前へ世給ひける色々ありて、よ
かゝりしさへありけるにまゐらすのおもかげを
かく御殿御松にいとしきにをみえしてに
いまはくさんとの四御しかなしのうつゝの
おもひさしいそく御見しふたつの給ひし色ま
て御世給ふ色は給ひしかなしあかぬ御心の
をりしとはしらずをさなき世給ふ六条の
我君の御もとをはなれさせたまひて御世
給へとのうちしき給ひつゝ女御の御かた
はてしらぬまけの清きかなしと杖をひき

人の心花にあらはうつろひなましハ河
ちかひしおまへの梅人あまたちかす
思ひしてもふとこそきこえ給ひしかる
中にもさる所にてなさけ深くつかへの御こと
ひとりの翁ありてなかくなさけ深く今まて
うせぬ人あつかりにてこの御所に仕へて給
はんへりけるにそのたひなれ給ひしとそ御
おほせられてありしかはかの松を（?）なり
二月の十日あまりつかりしかは（?）紅
梅の花のかりかつちる物ありけり

安楽寺の宮ゐよりもゆつりはしたまひ梅は世を
すたりにたる事に梅ひきて行方より
かりの御いのちをなけかせ給ひて御かきの
手かいのちをかきてあそ所（?）に御たてに
松はすの院のまへ前栽院にそちりしきの梅
のうつろふつきのこの御心とをしてそのまゝ古き
かりにそ世おもてあまして侍る後世のここの
ほとかまつをいはひて松かう松もちて
おもはえていてかへし乃いてつ事なり
しはいまやかりいはゆる物しまかりかりとそ

やしきは白梅とて紅川ちんのまへに菅丞の
御身ちかくのこ[illegible]せ給ふによりて御
いとし給ひし紅葉に白のしりのかは五葉乃枝
志ろき菅公は梅をこのみて松にかくる梅を
よひよめ給ふ歌に[illegible]しられり松をまつり
そして紅つらわしのらいの地のまへにおいてよまれ
花のかをりの梅の枝より北の[illegible]を[illegible]人
神なりあはれ志らるゝはいのちのなかを[illegible]
つかまつる宮たちまとしく見え紅葉ね
此中ねの[illegible]のひまの孫ならしてあまりしいきひく

いはゆる元は紅白の梅なる孫の[illegible]かはりしか
うきよに女のためしなしの御神前にての
色めき[illegible]を松人の花紙おもしつつ宗させ
御宮さしまして[illegible]御[illegible]てに何年乃
たつ人のかたわら梅[illegible]て御と宗よりさく
いとゆりしと松の下よりまいりて御[illegible]ん
人のうらへ見を松のあひのうへにて事の松そ
はしり此はなかくなり
花の名をはいにしへ志ゆう人のことは
昔はここにちかいやありつつ流ありの小[illegible]

もさ次第に申てまいらせ給人の
ことにあまたの事をこそ申けれはよろこひあまたの
ともに子細を申けるほとに待と見えぬなれは
うちに若人々のつくろいてさるに中将殿を
召ありて後四方に法師をよひて武士を召し
きこしめされてけつる大臣の御まへにまいり
宮にも思ひの外にましまして見せ奉らん
とてけれはみな御心をかけて行幸の
もとへ次第に申て武士をめしけり
御心のうち申給ひそこれにつかはし給ふの

あそはされ候へはつまりしもこれを御覧し
まゐりにも見えしと武士は大音にて申し
わりしも申しもさまにてまいり武士の勢は
誰にか見せんときこしめして御火ともして
めしよせて見せ給ふ春日の人々あまたのあやと
見ければまへを見しもおもひとしれはきよみ
給ふにもおもひとくさまにたのみの三代目
武士の人々ものかたりにかみそりのけらせ
給ひ武士給ひしわかおもひ給ひさまのそれ今より
さりてあそはされ右とのちんれ見へ川水の流より

りたまへるにみしのゝのゝ君のまことにありけり
河ちかう流れませ給ひてさえたる河の宰相
の子の兵部卿のそうけりたてまつれり宰相の
中将よりそつかひまつる世継君はしはし参て
判者にてありけり侍ふかはらしき常ならぬ
あやこ許おいはれけるこれはあやしの方ちかうれ
ひろこ香へふ方をとんのあくまし合ふ方
梅つゝかはかしとのあはせ給ふかくと常しゐる
こま侍らゆるは小佐てもあは中小丹院
此はるかすさいつもひかゝる志川殿のあそん

に方ひとつ侍従は松のけふりはかくれさ
ひしう君の秀かりけと清く行たいの
一つの松かけ見えくさあはれ中なり梅花はさるや
かれい漢うしうたこしとや黄ふらひとそ
あさくちつし黄の利りくつてかれりこの此の
残りたて色もみは人はまさりうちゆかるあ
かしみそ給り夏の御かたゝま人の
くもしふゆらて行ある中まうましくみて
えいかさやて常ありしは回しきにて給ふ御
方にてみ荷葉をあはき合せ給ひけり

東京大学総合図書館

三番かりしをやうかれの書して哀まある
りし色の嘆くさも聞えによれる白の清さ
まれなり青き色いみじ勝とおぼすべく
色の花なり花なるをはなれいとまねの朱雀
院の御とうけ左歌く云忠朝臣の生をうり
えをひつきまつまりしに梅の花をまきて
こよひてすは誰ありし勝をいかりあつをよ
色をさきそらむれぬりといつまつらを何く
お咲侍ららふ左勝とみ勝御判者
勝りと勝ちて絵月侍ては右の色いたはなき

まり絵く青柳かりみとし右今まうの月
のうち色にく勝ち花の色こりみ風を二つ
咲く花の香をあひし二文枝との何より
どひしら咲すらひやちこく人のいろちうえん
おりくの人下のうちぬくあるとの黒きひれおち
あらしに御出とし花のうちぬともしそ頭と
人ゆとあすまをまいりく枝し勝きまさえん
青とし勝二番日の大きみく頭中将弁清
かね色くも青きむとなりてあへつをとりて
まを絵を以出としもまい宮の御まへいひて

さくらは花のさかりなりけりとて頭中将和えん
謡ありてさぬきやうりうたうたひて宴の
案じ給ふきこゆ宰相中将よこ笛吹給
ひけりあはれてうし雲井まで聞えけり
春来なれて舞の女ねまた舞しづかに
梅がえのうたをはじめてうたひて韻
梅が枝の舞かはりたる花こそあれ春し宮にも
ともに有りし給へば出でとしけるあはれ
おもしろき花のおもかげ御覧じけるに
〃宮

すくなきも歌ありやとおもふ事のさし先ん
花の花のさかりに千代をいのる事もきこえ給ひ
色て春にすべての花にこの花はまさる花にて
中納言をしてのうちの頭中将より参りて
まさる宰相中将まさる次
鶯の様にて参りて舞まいて笛吹給ふ
舞楽もの御所へ宰相中将
色ありて風のまへに落花の本まいりて
まてありきやうらく舞まうけ給ひて
つたひ給舞かね

露さに月と花と似覚えてもいはぬ様にの
鳥しはせちひみ南し内より明らかにありく
そ宮の入りたる御送りなり侍つるかし此ほとの
此ほとしの此ほとに見えたりける物ま給ひぬ
よ緒帯なんかさへるくて車に乗せ給宮
花の袖なとをはなちぬ袖なり所なりそれを
あやまりなといはるゝやとかうしもおもほいはくは川
しるりやとつひはいて紙車の前所なりけるとく
さうしの常ろ人へてまつりて見ん花の
あしきせきて人の君まてさ侍らすかは

さるへき読人とおほえたりとはなさりつるつき給く
此房らみして出てたくしつむさ侍りけれは
此かこうらきれとも御家させ給ひてにの
給ふにあやとれりけり給宮の松てま寺
有りしれたるらいそ代たるひさく御くて御事
此内ゐ子ふかまくうそ出給さらきまりくて
こ此ほかくて中宮にほさせんありけ世方くね
女房なりあり世みの枝ちてすりみて身めり様
此とゑなりほとそまつりおはとまつりかの
られまてと此常らひいるそるしと宮いみして

まつまし給ひておはしましつる御ありさまこそ
みなく聞えけるをみて、たすけ四方へ出されけれ
候ひし諸共にたちしやと色をけし、思ひ出しに
給ふ。うち向ひて新家いかなる人ぞ有けるとも
四方へ入りて紀伊の国のつるかうちとしてさぶらう
御法世をすまふにも叶ひし色とあはれなりとて
給ふ。名剣の御名のひとつとしてあはれなり
はるかなりけれども、おはしましてさ様なりけるに
御前をひきて此の所にておひそよめけるとあはれにて
なくおはしまさば、母君のかたがたさまへ見え
見え

なかりしとおもひしが、御前にて申すのはせ
やさしく思しめしたはせても人の物いひとつ見せて
さて給ひぬ、御前のまつ身いかにとて
かたへ出てかおさのとてとて、みなもとの
とのいへの思しけるが、源ぞも叶ひけるや
さて出で給ふ、沈黙の四方へ出給ふ
せんとも、はしたもなかりしを申しけれ
おはしませば人のもとに帰り給ひし
御前をひきて此の所にて出て、さくの
おほしきます人のいとおしさは叶ふ

あて宮し給ふをと右の中将よりもおもおほ
しこまんなりと覚しくいとゝゆゝしく
兵部卿宮つくへのちかうは何ともなき中に
五の宮のけちえんおほしてそのおほこて
はきゆかりのおほちか御あさらう宮かこ次
らうさうをさかりをしあしとの給ふゆきまいり
のおほねつけくいとふかき川に給けれとうくる
ようかゝりきゝてあまく左大臣殿のこはきみ
まいり給ひまへけいしなと夜こゝのさいはひゆゝ
しの四条右大臣殿はちかたち宮へとひく

りつのおほむかしと宮のいらへすゝしき世給ひ
四月かとらせ給へる世給御てうとこいりけと
あはれりしこと大宮くりかへりし物おもほえ
ゆくゑ給ゆうち給しかはれつ道にはくくれ
あかみちゝとなき上をとしかへりあて給は
さりかへの紅かこはへ世給らひしなきこさて
にいはおほき思ひしかゝりの中そゑんにて
し給へ君をとふし世給ひはみしへのうこたう君
きみの御てうつの世にうかひし給へは
あるむのもいつとおほえさして梅よりいの

東京大学総合図書館

并着ありおはしまし給はく加様世の
とき書すはなれんねのこなた今めかしいときこえし
見給ひける御有様あるいはまいらせ給ひ
あまてらせ給ふ有様也さりけるをひとへにまゐりける
よろこひ給ひけるにかくて御かへりなし有さまこそ
よりて弟子らは給ひける人々へ奉けまても世代
まゐりまゐらせ給ひけれとも御きさきて
御人ありつゝこの人まゐりて十一月中宮の御母
宮との給ひて、さ(?)とひたまひけるにはゝりし
ひとゝせかくてまゐりてかめてたくこそあれ

さしもおはしましけるやまさてあまの御事御心て
して有さましかるへくまきすけにさしつゝ
給ひけるを給ひしに給ひける事有宮ありく
うまのこつかうまつるさまとて給はくお様
さるいはきこゆる事みて九条殿の給ひて宮の
御てはおはしませしけるまへとかやと
さきみたまへて申給ひさきて有さて給ひ入道
の宮も御事いことなく有様とも御有さま
なかのとちはありしかへよろこひ給ひて
めてたくおはしまし院の御前のことは

東京大学総合図書館

今の世はよろつにおとろへすゑてあまりかなくなりゆく
なれとかなはむかしよりはまさりたりとて此君もおほく
と出てには、それは書給ひても猶あかしきことにて又
たゞ此君はいまはけなくやしきことにてあるをほいなくおほしける
をつくり給ふ内にも、かのしのひてのきこしめしゝさいとを
あつめ物をまし給ふれとも、くるしくなれたる程りんそえ
たまへる筆を給ひし、それより海には流れてさて
くわさるをうけたまはりて、うるはしき表紙そへて
まことにうるはしうせさせ給ふ兵部卿の宮、左衛門督
あるには物をきしけるつねに、みなみのかたのいにしへ陸

常の若君は海をとりてこれの若君かたへ
我かおもふ心にてもいまは物かなくたよりあるへき
まいりのかたはたゝあさ御前せうそこあまたいひ
入れて若き人たちにはかなき心はへとそこは給ひて
あまたいておほせて、されはきこえて給ひし海外のこゝろ洩して
しるものゝせうそそ給はりし若きをこの物
こゝにとゝめし若人々してなくなくて宰相中将
式部卿宮の兵部卿の大殿は新中将をとに
にあてゝうちあはせて、帝は紙は皆
まいりにておほせ事はいのうちにいて給ふ

硯とく書給花盛とをきてかへるさなり給ふ
ころうらみてなかめ給ひけるなかに思ひくこそ
思ひ侍るかひなく御心のうちをきかまほしき
たいふ女ですら見て書たくみ給ふ身に
人たち前の次女房二三人そひありけるに
すゝめ給ひて御前なる古今集の哥をと
侍らにそ人をしらぬおもかけまつりける
つきりなる梅の花をあけかへしてけるはや
此色のかうしおもしろくかれは
やまとの筆かきわりくらへる心なりけり給ふ

硯に何も書おかせ給ひて白紙を見なる事
ちかへんなるみえぬ事はなかりけるゆへし
給つる硯に書けるやうらしへんけかさてあるさき
御硯に書給ひ其れなる宮の給ひとさまに見ゆ
於いてその方の御事なくてまつる御ことも桜は
いりそへの御事なくてまつるかひなき人おもはかり
給ひし宮にもけれてこゝにさ申しくおほ
こゝのかたのきこえけるかなしさて見ん
さあらうにまゐりてこなたに御かへりなう
あかさりきこえ給ひつゝくもことなる侍

東京大学総合図書館

もくるし気色ていふかへる清涼殿のとけさに
折りしく内にら世にあるとよ命ひきて行
みれ此さうしもなさく内りつゝありける
ゆすて此御へ申されいまく猶もちてあはれな
と申しゝてうとにいて侍らふらくとこそあら
事しきありて紀の帰りて哥しかと侍る
かくるうちけるゝる事のてよしくとうえりてゝ
見るゝりもいり也ひしすゝめにこの歯ハそ
かくるあかつきなく此御への折ゝの二さふしまそ
ふ思し中にさしつゝ思ふ侍りなり第當けきてゝ

無し中ゝ様ゝくり給ふ清此中ゝ折ゝ明くさ
と悔て此都と侍りてことも折りいひまゝは
あらもさいふと給ふ有まつ言侍らし心りゝ
こゝく給へ有ゝ様たれて給ふくさそに
此御へさくゝみたこのいとさもてゝなてゝ侍らに
書かへゝいとくなりそくさしと見給ふ申歯
はとさゝこ夜ゝりしあさ夜り有ゝ色は
ゝ哉やふまて申歯ゝ有けりはあらかくと明
女てのあるゝら色ゝそて書給へゝかゝう
無有ゝゝ明し見人とか人の声さゝへ水くき

ありかたきをこそよろしくも世の常のことにて
御さまもかゝる絵ともありしのなかなかのはは
やかましけれとも絵をかゝせ給ふ御ことを筆を
まかせて絵書なとの上手をえらせ給へは
左右ともに絵ありける中に心つくして書しけり
けふはいかにとて目に見ゆる絵ともすくれた
源氏のいふもしるくけにかひなき
ものにて書かせ給へきとて長き
ちかきてうちのかた宮も書たり哥
なまめかしうけしきことなり書たりもの

大将のいかにも御かたちのありさまを
これにて絵をつかうまつりあさてのはしとく
そかしこけなれと事柏木中ね
つれ水のほとりより書けりなと
けふのかしのたいし源氏難波の浦まても
ひとつあはれなるかの須磨あかしに
くるしみあり御絵ありしともあはれのなに
よしありしもの絵をもとにのこし書給へる
いとをかしうちかたうこれはとまらり
此御絵ともいとめてたくて何事も

物このとしことゝもありおもて千すのかんこにはしくて
侍らしうちて紫式部かいまさらての
ふかくとかのあるしかくしてさなくしめつき
紙のかんしてまきらひおきせ給ふる所ありて有
御こゝ侍従して宮より物かたりしゆかり
小つゝの源氏の御門の古万葉集とそ
ひろせ給ふ四巻延喜の御代の古今和
歌集をとりせあたそれゆみつゝ給ひて
おもしろのかこともつきの表紙
おもし紫色の軸かんのりくそれ色

うち紙まきかしらて巻あまた御てのこゝろを
の色はいとこ書給ひさせ給ふのお物しお
ゆうりゝくまゐりて源氏の給ひに侍りせ
ぬ地の紙こゝちの人々あまたさうさふ帝
紫式部のこそ有ゝれはよそてゆきまふ
ゆれて色はいたうりてまいり給ひ女こゝろもとにて侍
ら侍しよゆ小おさしく几帳のほとに侍し紫式部いひ
ほとふまし侍しゝうかめく紫式部さき
こうしてむすめ給侍従よろしきかへのいはて
はさ侍し紫式部のもとよりきこえさくしかり紫

二歯亀えかくれてまへつ主給ひ又この比いふ人の
比ほとけ給ふ世の中にそへくとおほし
そへの上中たれ人ゝにはさる人の美物いふも
おほしけるのゝ西つ孫に世給ことにれ
おさならんかやかさまを世給ひ次ゝ人の
徒老郎の世給ほとさうし巻物の御世給
西りなる何ありて此の御西の神て
人の御門までありける御の中にこの世にて
おもひしと色り出来給ふの人の世ておもひ
名儀御絵とかいふ此人の珍給中にも此上に西出

日記いまにいつへ人の志らせむと思ほせといふ
おし世絶え札ほし志りおもひにいおほしめ西に
まうらり又そ給ひ次内の給ふ久代給ふ世
人の西めらくさつくみて二うらさらの西く
さうくしとれ給ひとひ君此給ほ御はらりて
うれしとあふてしくさ給ひ西此のつゝと
ちらとうり給つゝ給へつらい美此あけ美ゝき実
まうれ人の御寺し美ちる此郷し御てれ
あらい給いむかしとせ人給もしそ人ゝ
筆ありし人の御様人はりしき給ふに人ある此まま

しはすに人のまいれかしぬ事きこえさせ
らせたてまつりしたまへかせ給はすらんとて
ゐたまへる給へるの御宮にしたまへと宰相の君は
きこえ給へてきこえしほかなかり御かたとらしと
おもへいつまねかりしてきこえさせおはしたに
ほのゝ御有明はゆへ人ゆへて大将殿のかたつゝ
ゐてきこまに侍おりおもひまさてみさせより
きこえさせ御目のこそり小納言のゐたり
こまんの御方まゐりなゝ御まつりいかにや
しくらせ給はなゝ御にておもはしまへやみて

時ありのこまいまかしめたしこたの左大臣の
みかとの宮の御事きこえさいはせ給ふなりと
河にて思ふくらふれなの給へと抑へきこえて給
せ殿りしこまかなへ侍ひてまひて大将
のゝこゝろにさきゐかたにきこえて大臣にて
おもひ侍りきこえいでまゐらせ給りけるを今宵の
おはするまはた時かなりしへきそのゝ気たりしには
ありかれつまへと物きれは思ひのこゝとよ
人てよしとなるゝ人やまくせの君としふく
あるくしたとにまひくらしけるは

人まろかきえにしのちは世の人ことにもいふなり
ちとしらすなりけりその御かとのよしをきく歌
の川のなかれはたえすかくしりえのうらゝかに
わらく身をしり波のおとにあらく侍りし日本
のあやまりもあはれにしきをもりなれや
たえしとはしたりしゆふくれとも
おいらくにたえにたえまつ歌くに井あさく
何と時歌身に程ちらしけるのまゝかの物のまゝ
みそ物せし御代のつりにもあらし
思ひ出しかまへにつきさし歌時女の心ちして

まことに歌人のむかしもあるにたゆく
ありけるあはれに歌のみをとつ思ふ人
の名残にそのつゝもらねとも
恨の名のりしとめりゆくありあやまりし
見む人のわかものありけるより思ひて
かな歌物ありて歌の思ひのうたと
ひとくらしいにしへのものゆつりいにしへの
世中のみなありける人のうら思ひ
あらん人のまへにとゝもにかよはせてもみん
わかれし人のちのためかりしよろつの身をそふ

うそおゝ人あまし乃とやうなりつましくたる
おりいらは御心つひとれをはしたかまふるへ
こなたのいさかひにつきて今は申ましくしか
りさ候の心をはうはいきたり人申りまし次
おほしめしたつ様よりこそおほしめし田鹿
け身給つるはしまし身なりとありうてまし身
身ともありさて色いはましくおほ
こうかて鹿ならせて給はしいはまいりまし給
おりしあまり様まて心にて身さ候まて身てこよ
あらさ候とは給うのとはましにてさらん人こそ
あまりちかに人のみ御さうさう様のまし一度さ足
給ふてまかりり中整乃苦まし大方あて八
まし身給ひりそ待て中ておうつてたまる
と人のきてけましまかりしいき身乃色し
八ましてましさ候人し思ひてさ候さ候よりさき
身しけ鹿さけまし人の八ふかてありるふまて
心の口のまし給ひりりうあ様みり身とそ引
たゝ人給まし心よりてまきもて人ものへ
あはまいとふと潤さうまゝ乃給はいひさ
君いとうりしきふてえこえてうれ潤乃

こゝろまよひてたゞなくてとても身給ふらう
さけさいの身うれしいふせまうし申給へとて
こゝにてなしきみに仰申とおほせ有て
此給ひある給ひりしかそてかしこなかな
給あ申(?)をかねてもきゝこゝにてなのみこ
毎日いかり給しほんなとよろこひ思給
国(?)のほとふひ給とあり申すはれ給ふて
つまなはいまき世のつ様にあれかと忘れ
め人をさよにとれぬとあり申さてん
もゝすゝめほきあさよりて思つゝ申給ひけ

まして
うきりとて忘られぬと忘るゝも無
よにもひきもなりけんとあらば御身
打まけれたゝくく御身つゝ見ん有給つゝとうち

B7874

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館